

John Keats (1795-1821) By Joseph Severn, 1816

Oxford Dictionary of National Biography より

1795年ロンドンで生まれる。彼が馬車宿で生まれたと言われている事、父親が厩務員であったと信じられていた事が彼の生涯を通じて保守党批評家からの攻撃材料となった。しかし、彼の生まれた場所、彼の家柄についての確証はない。

少年時代

1803年(8歳)で学校に通うが、翌年の父の突然の死、母のその直後の再婚があり、学校にはなかなか通うことができなかった。これらのことから家族の関係は著しく悪化し、このことはその後のKeatsの経験すべてに陰を投げかけた。

母方の祖父の死によって、再婚したばかりの母の遺書についての異議申し立てなどがあり、家族内に亀裂が生じることになるが、やがて母との和解があり、Keatsは学校に通い始めることになる。ここでKeatsはCharles Cowden Clarkeと友達になる。Clarkeは、Keatsをその「気高さ、卑劣な動機に対する無関心さ、なだめやすいこと、寛大さ」故に人気者であったと述べている。もう一人の友達はEdward Holmesで、少年時代の「Keatsは、本の虫ではなく、運動には積極的であり、特に喧嘩っばやかだった。」と述べている。Clarke's SchoolでKeatsの受けた教育は当時のパブリックスクールとしては良かったものと思われる。Keatsは科学、実務的教科、ラテン語、フランス語を学んだ。彼はギリシャ語を学ばなかったが、Lempriere's Classical Dictionaryのような作品からギリシャ神話を吸収した。

1809年(9歳)、Keatsは学問に専心し始め、母への近親感を強め、妹、弟達に対する責任感を持つようになる。

見習い、医学訓練

1810年(14歳)KeatsはClarke's Schoolを去り、内科医Thomas Hammondの見習いとなる。しかし、1813年(17歳)、Hammondと喧嘩をして、Hammondの病院を出ている。

1815年(20歳)Guy's Hospitalに学生として入学する。Keatsは学生仲間の間では人気があり、友達の輪を広げていった。この時期の新しい友人に次の2人がいた。

William Haslam 1816年(21歳)弟George Keatsに紹介され、特に重要な友人である。Keatsとほぼ同じ年で、事務弁護士でKeatsの能力を評価し、頼れる友達であった。

Joseph Severn Keatsより2歳年上の画家。Keatsの亡くなる直前の数ヶ月の献身的な世話によりKeatsはイギリス文学史上に特別な場所を得ることになる。

Keatsは医学の勉強を続け、1816年(21歳)薬剤師、内科医、外科医の資格を取得し、施術を行うことが出来るようになった。この成功の後、休暇をとり弟TomとMargateを訪問し、3編の詩を書き完成させている。

詩人としての天職(1817)

休暇からロンドンに帰るやいなや、Keatsは新しい文学仲間との交際に夢中になり決定的な転換点を迎える。Keatsは、Cowden Clarkeから、Leigh Huntを紹介された。Huntとの親しい交際が始まり、Huntから画家Benjamin Robert Haydonを紹介される。更にHaydonにより若き著作家John Hamilton Reynoldsを紹介される。ちょうどこのころKeatsの創造

力が爆発する。10月のある夕べに、Clarke から Chapman 訳の Homer を見せられて、二人は夜を徹して読みふけり、Keats は翌日 10 時に "On First Looking into Chapman's Homer" を書き上げている。これは、驚くべき出来映えのもので、最も洗練された英国 Sonnet となっている。1816 年 Hunt は「若い詩人たち」("Young poets")を The Examiner に掲載したが、Shelly, Reynolds と並んで、Keats をイギリス詩の若い世代として紹介している。Keats と Shelley はその年の 12 月に初めて会っている。

1816 年 12 月(21 歳)初め詩人としての天職には逆らうことができずに、医学を諦めることとした。Keats の新しい文学上の友人の中に、Clarke から紹介された出版者 Charles Ollier がいた。Ollier は既に Shelley の詩を出版しており、この新進気鋭のスターの詩も出版したいと思った。Keats は Endymion の神話についての物語詩の構想を野心的に練っていた。

エンディミオン(Endymion)

医学を諦めることを決意した Keats は Hunt や彼の友人の近くに移り住む。間もなく Keats は Reynolds から Charles Wentworth Dilke を紹介される。Keats より 6 歳年上の Dilke は、几帳面な公務員であったが、文学に対する素養を持ち、特に Shakespeare に対する関心が強かった。Keats は彼の影響を受け、Shakespeare および同時代の作家を読むようになった。この頃、Keats は同じく Reynolds の紹介で James Rice と Benjamin Bailey に会ったと思われる。Bailey は、1816 年に Oxford に入学を許可されている。Rice は健康のすぐれない若者であったが、かれの機知と不屈の精神は Keats を感心させた。Keats は Hunt,他の友人との交遊関係を続けていたが、新たな接触が Keats に影響を与え始めた。それは 3 歳年上の Shelley であった。Keats は弟 George への手紙に「エンディミオンは私の想像力を試すものとなろう。4,000 行になるであろう。」と書いている。これは、Keats の Shelley に対する競争心だと考えられている。Keats は、一人でこのプロジェクトに取り組むために 4 月にロンドンを離れ、Isle of Wight に向かった。

5 月の終わりに Keats は Hastings の近くの Bo Peep の村を訪ねて、そこで Isabella Jones*に会う。Keats の女性との関係は決して心地よいものではなかった。Keats は「体格の小さいことは軽蔑に値する、身長の高い男を女性は好きにならない。」と言う考えを持っていたようだ。Keats が実際に性的な経験をしたかどうかは、推測の域を出ないが、Isabella Jones と何らかの性的関係があったと推測される。Endymion の 2 巻の冒頭にその影響が出ている>(*キーツにとって、Isabella Jones は初恋の人と思える年上の女性であり、また単に愛を感じる女性としてだけでなく、キーツに文学世界をなにげなく示し、詩的感覚を刺激してくれた貴重な存在であった。「キーツ 人と文学」 富田光明 勉誠出版)

Keats は 6 月 10 日に Well Walk に戻り、夏の間、Endymion の仕事を続けた。1 巻と 2 巻の原稿は 8 月末に完成した。3 巻が完成したのは 9 月末で、第 4 巻および最終巻は 11 月 28 日に Burford Bridge で完成した。

その夏の終わりに、Keats は Charles Brown に会う。Brown は穏やかな性格の持ち主で、John Street, Hampstead に Wentworth Place (後に Lawn Bank, Keats House)と呼ばれる二戸建ての家を建てた。Brown は Keats の最も親しい友人となった。

1817 年末から 1818 年初め Isabella

1817 年(22 歳)12 月 5 日に Keats は Burford Bridge から Hampstead に戻り、Keats は忙しい社交生活に入った。

1818 年(23 歳)2 月から 3 月にかけて Endymion の校正修正を行っていたが、Keats はこのころ Isabella の執筆を始めた。これは

物語詩で Reynolds との共同企画で、Boccaccio(1313-75)のデカメロンから物語詩を作ろうとするものである。この詩は意味ある新しい出発で、彼が今までに試みたことのない複雑な構造を持つものである。

1818 年夏：徒歩の旅

1818 年(23 歳)5 月 Keats はロンドンで友人達と交遊関係を続けていた。Charles Brown と Scotland で徒歩の旅をするという計画を練っていた。この旅は長編の古典的詩を試みるための資料を集めるためのものであった。しかし、またもや、この計画は、種々の難問に直面して実行が難しくなった。難問とは、弟 George が結婚して急にアメリカに旅立つことになったこと、妹との接触が難しいこと、弟 Tom の病気の悪化したことなどであった。又 Keats 自信も健康を損ね、医者から外出を止められていた。又財政的心配もあった。

6 月 22 日、Keats は弟 George 夫妻、Charles Brown と共に London を発って Liverpool に向かった。Liverpool に着くと Keats と Brown は Lancaster への旅に馬車を使って出かけた。Lancaster からは南の湖水を幾つか徒歩で回ったが、Wordsworth が不在であったのがっかりした。その後も徒歩の旅を続けるが、この時、Keats は”On Visiting the Tomb of Burns”, ” To Ailsa Rock ”, ” Ah, ken ye what I met the day”などの詩を書いている。旅の終わりには Keats は扁桃炎を患い、医師に直ちに London に帰るよう命じられる。

Tom Keats の死：ハイピリオン(Hyperion)

Well Walk に戻ったが、相変わらず喉の痛みは続き、医者に家にいるように言われる。弟 Tom の症状も非常に悪くなっていた。Brown の Wentworth Place の半分は、若い未亡人と 3 人の子供が借りていた。長女 Fanny は 18 歳であったが、Keats は弟 Tom の世話を追われて、彼女に関心を持つ余裕はなかった。

その頃、Keats は何件かの批評によって深い打撃を受ける。

- (1) J. G. Lockhart (Blackwood’s Edinburgh Magazine) Poems and Endymion に対する攻撃
- (2) J. W. Croker (the Quarterly Review) Endymion に対する攻撃
- (3) 匿名者 (British Critic) Keats の Poems が猛烈に攻撃された。

12 月 1 日弟 Tom は死亡した。

Keats は Brown からの寛大な申し出により Wentworth Place に住むことになり、社会生活を再開する。Keats は Fanny Brawne としばしば会うようになる。二人お互いを許し合う関係になっていたが、彼女の母親は Fanny がまだ若いこと、Keats の将来性を考えて反対した。又 Keats の友人も二人の交際を反対した。

1819 年春：偉大なオード

5 月の初めに偉大なオード”Ode to a Nightingale“が書かれた。

Brown は後に次のように述べている。

ナイチンゲールが Wentworth Place に住みついた。Keats はナイチンゲールの歌声に平穏さと喜びを感じた。ある朝彼は朝食のテーブルからスモモの木の下の草地に椅子を持ち出した。そこに彼は 2~3 時間座っていた。彼が家に戻ったとき、彼は紙切れを手にもっているのに気がついた。そして彼はその紙切れを静かに本の後ろに押し込んだ。調べてみたら、その紙切れにはナイチンゲールの歌についての彼の詩的感情が書き込んであった。

1819年夏、秋 : Lamia and the Ode to Autumn

6月 Keats は Rice の誘いで Isle of Wight に行き、Shanklin に落ち着いた。Fanny Brawne にラブレターを何通も送った。彼の健康は勝れなかったが、彼は Lamia の最初の部分を書き上げた。Brown が Shanklin で合流して、二人はドラマ Otho の制作にとりかかった。Keats は同時に Hyperion を The Fall of Hyperion として書き直した。

8月末から9月初めにかけて、Keats は Winchester で Lamia を完成させた。Keats の主要な詩の最後となった”Ode to Autumn”を書いたのは9月19日であった。

病: 1819年(24歳)~1820(25歳)

11月 Keats の容態は相変わらず優れなかった。クリスマスに Fanny との婚約は正式のものとなったが、秋に Keats は Fanny から離れようと試みたが、うまくいかなかった。Keats の Fanny に対する情熱は押さえがたいものになっていた。

1820年1月弟 George がアメリカから帰国し、兄弟は2人して、旧友を訪問し、旧交を暖める事が出来た。その後、George は Liverpool に立ったが、これが二人の最後の別れとなった。Keats は激しい咯血に見舞われる。

2月の半ば、Keats は苦悩の末、Fanny との婚約を破棄する申し出をする。5月 Keats は Brown と Gravesend に旅をするが、そこでの別れが、最後の別れとなった。

6月、Keats は校正をしたり、友人を訪問したりしていたが、再び咯血に襲われる。誰が見ても、とりわけ医学の教育を受けた Keats から見ても、母、叔父、弟を殺した結核に Keats がひどく冒されているということは明らかだった。

6月末、Taylor と Hessey は Keats の “Lamia”, ”Isabella”, ”The Eve of St. Agnes”、Ode, Hyperion を含むその他の詩の全集を発行した。Keats はその表表紙に、挑むように自身を”Endymion の作者”とした。この全集は、今ではかつて出版されたイギリスの詩集で最も大切なものと認識されている。発行後の数週間、この詩集は一般的に、好意的に注目された。Jeffrey は熱狂的な書評を書き、Keats に対する初期の屈辱的批判を払拭した。

7月半ばには Keats の容態は詩を書けないくらいに悪くなっており、医者は彼にイタリア行きを命じられた。

イタリア：死

9月、Keats は Severn に伴われてイタリアへと長旅に旅立った。嵐で出発が遅れた事、イタリアでの検疫に時間がかかったこと、パスポートの手続きに時間がかかったことなどで、ローマに着いたのは11月15日であった。

多くの苦難の中で、時には勇気を持って、不屈の精神で、運命に立ち向かった Keats は 1821年(25歳)2月23日 11p.m に亡くなった。最後まで忠実に Keats に付き添った Severn は Keats の依頼の通りに、墓石に「ここに、その名を水の中に書かれたものが眠る」と刻んだ。

死後の名声

Keats の評価はビクトリア朝時代を通して上り続けた。1880年 Matthew Arnold は、Keats の業績を Shakespeare と同程度であるとした。Keats の早死という悲劇的な環境及び彼の詩人としての生涯の短さの故に、20世紀の伝記作家は好んで Keats を取り上げた。多分イギリスの詩人のだれよりも多く、Keats の人生は、調べられ、書き直されたことか。多くの人にとって、現実の生活の苦しみ、むなしさから抜け出して、空想の甘美的な夢の世界に憧れるロマン派詩人の良い例となっている。この事は Keats の知的強壮さ、文学的職業主義、ユーモアのある性格を過小評価することになっている。彼の精神の寛大さ、文字の影響、詩の読者にとっての彼の作品の重要さなどで、彼がイギリス詩人のもっとも偉大な一人としての名声を確認することができる。